

あを 2

2025



撮影・墨沱

青蚓龜蛇

竹内弘子・赤座典子・鎌倉喜久恵

昔牡丹の昔も花とも知れぬ夏さ

弘子

葉陰より侘助の白煙のけり

典子

枯菊に昔まが一葉残りけり

弘子

二月集

坐・誹

佐藤 竹僊

銀木犀伐り新建材の家がもう
枯草に三々五々と風過る
ちりぢりになるときに固まり秋の風
おさがりや目高の水にまづ著く
アイドルはCGはだへ富正月



猫の夢見てゐし日の射す布團かな
公園の片方に寄る落葉かな
一本の枯が枯野になつてゆく
足の爪切るにほどよき冬日差し
まゆ月の下をさざんくわ散りかさね
掌を春の佛はこちら向け
サバンナも秋の大地も大食卓
あふぎ見れば見下ろしてゐる桐の花
老人に氣配のありぬ黒目高



茶の花

須賀敏子

茶の花や住まひも人も古りにけり
冬晴れや豆粒ほどのジェット機が
半纏や句作に悩む猫背かな
冬めく日マイナカードを受け取りに
鬼柚子の黄色く重く育ちけり
好きな色乙女椿のただ一輪
遠く住む妹元気柚子は黄に



雑詠

都築繁子

鴨の群側に孤高の鷺一羽
ゆつくりと進む一団鴨の群
池の面に散りばめたやう鴨浮かぶ
広き空池面に映ゆる冬紅葉
一ヶ所と決めて片付け冬の晴
余命など知らず三年日記買ふ
聖樹の灯青と空色眩しめる



朝日

長崎桂子

夜の帷つい足速に虎落笛
霧氷いで御在所岳や明けにけり
遠景の伊勢湾やひらこ霧氷
明けちかし枯色おびし木木さわぐ
朝日に外ぬくいちと新聞よむ
庭師きて手早い仕事うれし感謝
音なき雨に風おこり氷雨なり
銭湯ぬりかへ客うれし年の夜
窓あけてかすかに聞くや除夜の鐘

落葉

森なほ子

どちらからともなき会話落葉の中
オープンカフェ柊の花の香と思ふ
落葉して落葉の色の木のベンチ
木の瘤と見をれば小鳥首廻す
坂八分来てふりむけばただ落葉
バス停のバスに追ひ付く時雨かな
豪雨明けて道に張り付く散紅葉
ねんねこに育てし子らの皆五十路



板場越し娘の吉報や冬桜

「わらしべ」やでこポンとなる冬林檎

刻々と針葉樹林雪像に

残る柿ひとつひとつに丸き雪

急逝の友の無念や冬落暉

被爆者の声よオスロは十二月

「被団協」の記事を切り抜く年用意



そして今

秋川 泉

巨大化の大根今日は五十円

柚子搾るペットボトルに溢れたり

しゃりしゃりと乳歯でかじる冬りんご

茶の花にいい子いい子と云ふ少年

北京語の歓声上がる冬花火

冬晴れやはにわの笑みのあたたかさ

そして今夫と並んで日向ぼこ



平和賞

七郎衛門吉保

平和賞寒風突ひて一矢かな
当世風越後の歳暮ルレクチェ
トロリーも役割終へる冬黒部
長靴がスタンダードな雪の町
マニキュアをして出を待つや雪女
この年は四季二季五季の冬至かな
口争ふメジロホオジロ冬の庭
葉書買ふこともなくなり年の内
ゆく年に珠洲も輪島も四面楚歌
駅伝を待つ街道の冬堇



光

篠田純子

酒樽プランター巫女丹精の稲稔る
ひざまづき巫女稲刈るや忌鎌に
ミラーボール回る敬老歌謡ショー
敬老歌謡ショーカクテル光線赤青黄
囁み合はぬ一途と不実近松忌
ヒール片方落ちてる銀座十二月
不定愁訴消ゆ極月のイルミネーション



ボス

篠田 大 佳

ボス猿に会へる奇跡や石路の花
機嫌よき乳児にささる冬日かな
警官はモデルに見とれ冬の朝
天気雨抜けて千代田のもみぢかな
警棒を伸ばす警官十二月
月冴ゆるAIだつて死にたくない
初雪や触れるととけるささやきに
喉越しも香りも広げ蕎麦湯かな
天領の坂の暮れゆく師走かな



十二月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

秋じまひ地球も月もよく動く

佐藤竹僊

一日も一年も、本当にあつという間に過ぎてしまうのは、私達老人の誰しも日々痛感している事です。その地球を休みなくせつせと廻る月もいて、これまたあちらと思えばこちらにあつたりで、その動きも大きい。スケールの大きいこの句に、一体どんな季語がふさわしいのか……？ 作者は「秋じまひ」という人間臭い季語を選びました。収穫を終えてやれやれと休む人間……。人間には休息の時がある。(なほ子)

この蟻は強制労働冬の草

佐藤竹僊

「アリとキリギリス」の寓話にあるように、ステレオタイプの蟻は働き者と扱われます。しかし、蟻の中にも働かない蟻がいて、七割の蟻は日頃は怠けているそうです。怠けている蟻の中には、働き蟻が倒れた時に働き蟻に変わる蟻もいるそうです。掲句の蟻は、冬の飢餓を乗り切るために働き蟻になったものの、怠惰な生活が忘れられず、もやもやを抱えたまま働き蟻として動員されているようです。仕方なく働く怠け蟻に共感する労働者の声が聞こえてきそうです。(大佳)

秋深し美容師であり占ひ師

篠田純子

美容師にして占い師とは意表をつかれるが、どちらも「師」であり人と一対一で向き合う職業という点は近いので、同一の人であつても不思議はない。むしろ客を探す手間が省けて便利なのかもしれない。「秋深し」が効いている。彼女、彼の人生を感じさせる。(なほ子)

曼殊沙華 鷺の捕食の長々と

篠田純子

捕食とは、生物が他の生物を捕へて食べることだが、「鷺の捕食の長々と」の“長々と”はじつと水の中に立つて水面を見てゐることを含めてのこととおもふ。鷺は魚を捕へたらあとは飲みこむだけ。長々と喉を魚を通してゐたら大ごとだ。この句の弱肉強食、さうしなければ人間を含めて万物の生物が生きてはいけないうにした創造主の責任である。純子さんもこのやうなことに近いおもひを抱いてをられるのではないかと「曼殊沙華」といふ季語の斡旋におもつた。(喜孝)

旅人はやさしきナード 暮の秋

篠田大佳

ナードという語を初めて知りました。新聞テレビはよく見る方なので、調べてみて軽くショックを受けました。英語圏で数十年前から使われ出した言葉で、意味はオタク、マニア、人付き合いが悪い、身なりをかまわない等々の人々をいう。作者久々の「旅人」が登場します。「やさしいナード」、雰囲気は伝わる。自画像でしょうか。社会の変化とともに若い世代が登場して、それまでの言葉で表せず、新しい言葉ができる……それを聞くこともなく過ごして来た世代。ということ

教えてくれたこの句に感慨を覚えました。(なほ子)

秋雨や若き鳥のかあと鳴く

篠田大佳

「若き鳥」に注目した。秋雨にカラスを並べると、私などは古臭い俳句をおもひ、それらしく作つてしまつたらう。大佳さんは秋雨の中で鳴く鳥を「若き鳥」と詠む。常套的なオノマトペである鳥の声の「かあ」も、この句の中では、リアリティーを感じる。艶のある声を聞くことができた。平凡な句と読み捨てられるかもしれないが、「若き」で生き、鳥は自己主張をしてゐる作品になつた。(喜孝)

亜米利加の野球見ながら柿を剥く

須賀敏子

こういう人達日本中にいたでしょうね。柿、林檎、栗、芋などせっせと剥きながら声援を送つたものです。中には手を切つた人もいたかも……。こうして見ると、断然片仮名より漢字表記の良さが分かりますね！ 大谷選手、日本人の規格越えの体格と日本人の控えめ、真面目、チーム思いなどの長所をたっぷり持って、このまま野球人生を全うして欲しいですね。この柿は干し柿用でしょうか、手もとに気を付けて……。 (なほ子)

§

「アメリカ」と書いても良ささうにおもふが、「亜米利加」と書くのは敏子さんの遊びどころである。遊びどころといへば、この句そのものが遊びどころでできてゐる。大谷の全試合？をNHKは中継してゐる。嬉しいとおもふ反面、どのくらいお金を使つてゐるのだらうかと要らぬ心配

をしてゐる。リハビリ仲間も大谷だけはチャンネルを合はせる人がゐる。今日はホームラン打つたと喜んで会話をしている。敏子さんも、そのやうな心持ちでNHKBSを見てゐる。見ながら「柿を剥く」と詠むのも遊びごころである。(喜孝)

簡単なレシピの料理 秋茄子

都築繁子

昔の秋茄子は小さめで、形も悪いが味は濃かった。今スーパーの秋茄子は夏のものとも味も見た目も変わらない。とはいえ作者はたまには目先を変えて、と新しい料理に挑戦しておられる。茄子と言えこれ、と全く変わらないレパートリーを繰り返す自分を反省しました。(なほ子)

秋さやか土手のぼり切る杖について

都築繁子

この文を書いてゐる二日前、繁子さんからLINEをいただいた。

「前から膝に違和感を感じておりましたが、先日30日出かけたところ膝が痛く歩けなくなりました。膝のMRIを撮ったりして、膝に小さな骨折が見られるようです。安静にしあまり歩かないように言われました。」

とし、『あを』脱会の意を伝えてこられました。膝の骨折とは私の想像外の痛さであらうとおもふ。ご自愛専一と願ふばかりである。

「さやか」は「明か・清か」と漢字を当てる。「さやか」は、秋の季語であるが、「秋さやか」と

丁寧な詠むこともある。霞や月もこのままで季語だが、春霞や秋の月と使はれる。しかし和歌とは違ひ俳句の音数制限のため頻度は少ない。

遠く居る子は春霞親心 高浜虚子

ふるき名の角鹿や恋し秋の月 芭蕉

繁子さんの杖さばきは軽々と土手を登りきる。私の杖さばきと比しはるかに健常者に近い。それなのにと改めて無念におもふ。元氣になられ「ただいま」と帰つてこられることを祈念している。(喜孝)

名月や雲ふりはなし輝けり 長崎桂子

作者はただただ名月を讃えています。秋空は雲もなく、月がただ輝いている。その形、光、氣象条件などなど、古人がさまざまな月を比較して、最も良いと結論した月の情緒を再確認するうちに、作者は月を愛でています。(大佳)

拭き掃除をへて窓外秋の色 長崎桂子

わたくし、ここに住んでから拭き掃除をしただらうか、と恥じた。コーヒーの粉をこぼすと、電気掃除機を使ふくらいか。自慢してゐるのではない、恥じてゐるのである。こんな人がこの句を読むと、何とも気持ちが悪くなる。「窓外秋の色」とつづけて声になると一段と気分が良くなる。(喜孝)

桑の実や媼に戦火遠かりし 森なほ子

「媼に戦火が遠い」というのは、物理的に遠いのか、時間的に遠いのか、イメージから遠いのか、悩ましいところです。取り合わせている桑の実は、「マルベリー」という名前で食用として取引されていて、アントシアニン、鉄分、ビタミンCを豊富に含み、栄養価も高い、というのが売り文句のようです。エネルギー源というより、内臓が健康であるというイメージです。戦争に積もる恨み憎しみを一喝する、精神の健全さを読みます。（大佳）

川音へ降りる階段葛の花

森なほ子

「川へ降りる」とはいはず、「川音へ降りる」としたところはなほ子さんである。階段を降りる作者も川より、川音に興を覚えての行動なのだらう。いや、葛の花で川そのものは見えず、聞こえてくるのは川音ばかり。「川音へ降りる」と詠むことで葛の花の茂りやうが浮んでくるのである。石段ではなく、階段としたところに、手作り感のある木の階段ではないかと勝手に想像してそのあたりの風景を想像し楽しんだ。（喜孝）

落葉松のチェンバロ響く秋野かな

赤座典子

ネットで検索すると、長野県の佐久地域にカラマツで作ったチェンバロがあるようです。チェンバロはピアノの前世代の鍵盤楽器で、ピアノは弦を叩いて音を出すのに比べて、チェンバロは弦を弾いて音を出すので、弦楽器のような音色を出します。平均的なチェンバロの音色しかイメー

ジできませんが、森の中の音の籠った小ホールの中で演奏された楽曲を想像します。（大佳）

S

落葉松林をチェンバロの音が流れる、のかとはやとちりしたが、「秋野かな」とあり作者の意とは違ふと知る。大佳さんの鑑賞により落葉松材で作られたチェンバロとわかつた。チェンバロの音色は結構多彩で、強くも弱くも優しくも激しくも響く、表現力豊かな楽器である。秋の野に流れるチェンバロの音を聞いてみたいものだ。今句集を作ろうと自句を何回も読み返しているところ。〈梅雨嵐グスタフレオンハルト響く〉といふ独りよがりな句も入れるつもり。（喜孝）

退院の日にひらきたる曼珠沙華

秋川 泉

誰の退院かは句では明らかにされていませんが、退院の日は、懸命な処置がひと段落した区切りの日であると考えられます。作者の気分上添えられた曼珠沙華は、鮮やかな赤色と捉えて、退院後の生活の気持ちを高めていると考えれば良いでしょうか。あるいは、入院の疲れに生じる気持ちの弱さを支えるような鮮やかさだったのでしょうか。何にせよ、曼珠沙華が作者の心情に何かしらの励ましになったと読めます。（大佳）

秋茄子や今朝目覚めたる夫がゐて

秋川 泉

三六五日くり返してゐる事をことさらに五七五にまとめるといふ事は、その事が平凡なやうで

平凡ではないといふ証左である。この句の「秋茄子や」は秀逸である。ありふれた身边にあるものほど、この句では光り存在感を覚える。切字の「や」は、使わず「秋茄子」とするも一つの考へである。(喜孝)

秋の風 提灯の如コキア揺れ

七郎衛門吉保

コキアは簾木の別名で、情緒としては夏のものと考えて良いでしょう。簾木の例句を読んでいると、視覚的な表現や道具の原料としての情緒が多く詠まれている印象を受けました。掲句もコキアの揺れる様子を描いていて、視覚に訴えかけてきますが、秋の風と取り合わせることで、簾のようなかさかさした音も聞こえてきます。掲句は、視覚と聴覚の両方を刺激されます。暑さが残る秋という季節感も、どこか涼しげです。(大佳)

S

私も此処に住んですぐコキアを植えた。翌年は一本のコキアが庭いっぱい広がった。その翌年全くコキアは姿を見せなくなつてしまった。

秋風に揺れるコキアを「提灯の如」と詠む。コキアの形状を捉へたおもしろい比喻。率直な詠みぶりに好感を覚えた。秋風にコキアはそろそろ色づいてゐることであらう。(喜孝)

俳句と着物

第二話

襲

七郎衛門吉保

ここ数年、NHKの大河ドラマを見ることはなかった。令和六年に放映された「光る君へ」は、久しぶりに最終回まで見続ける結果となった。時代を読み取る手段の一つとして、大河ドラマの初回だけは必ずチェックし、継続するか否かを決めてきた。その延長線上に過ぎなかった。

源氏物語も光源氏にも特段の関心もなく、ましては主演の吉高さんのファンでもない。見続けるきっかけは何？と振り返ってみた。

それは、登場する役者さん方の衣装。十二単に代表される女御・更衣などの女性のそれらもとより、光源氏風の男性の衣装にも美を感じた。今日にも通じる、着物の世界だったからである。

角川俳句大歳時記春号に、着物に関わる季語は十一語掲載されている。うち「葦の衣」「花衣」「鶯衣」「柳重」「躑躅の衣」「桜衣」「山吹衣」は、衣すなわち着物を通して、春を表す色彩の季語となっている。

そしてその色は単色ではなく、正しく十二単にみられる、色彩の襲から生まれる色目を、季語に取り込んでいる。「花衣」には鈴木真砂女の「花衣紺を己の色として」をはじめとして、二十三句が掲載されているが、ほかの衣では一句も掲載がない。しかし詠まれなくとも、現代の歳時記にも季語としてきちつと残されている。日本文化や俳句や季語の凄さなのだろうか。



息長く眞夜の秋風庭とほる

佐藤 竹僊

北風を近ごろ丸き背で受ける

篠田 大佳

枯蓮のかさわさと鳴る上野かな

妹よブロッコリーの緑濃し

須賀 敏子

短命の母の墓前に秋惜しむ

池の端に置かるる浮き輪冬浅し

都築 繁子

繰り返す鴨の航跡冬紅葉

疲れきて未だ中腹野紺菊

長崎 桂子

店頭のはしりの野菜冬きたり

この服も派手になりしと秋扇

森 なほ子

払はれて出湯に浮きたる羽虫かな

寒いかと文鳥に問ふ冬立つ日

赤座 典子

退院は栄えある帰還冬苺

越前の降りず降らずみ冬菜畑

「もうやめた」立ち上がる子に放屁虫

秋川 泉

野良猫の遊びあきたる放屁虫

立ち飲みにいささか呼ばれきぬかつぎ

芭蕉碑に沿ふ帰り花戸塚宿

七郎衛門吉保

踏切は故郷の音石路の花

すずめ瓜赤くなる頃嫁ぎたる

篠田 純子

里神楽翁の髭の靡き癖

金賞の菊にとまりて蝶しばし

喜孝抄



季語あれこれ 「きさらぎ・立春」



「きさらぎ」は陰暦二月の異名。新暦と陰暦ではひと月ズれる。新暦二月を「きさらぎ」と詠む人も新暦三月を「きさらぎ」と詠む人もゐると推測する。それはともかく「キサラギ」は早春のひびきがある。作品で「きさらぎ」と「如月」を並べてみた。『あを』では句数は拮抗してゐた。

きさらぎの枯野をわかし川光る 早崎泰江
 きさらぎや八十路長いか短いか 芝宮須磨子
 きさらぎや魚を焼かず誕生日 芝 尚子

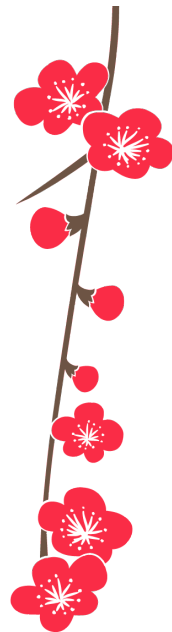
きさらぎや何時もいつとて富士は富士 須賀敏子
 きさらぎの制服の丈短すぎ 芝宮須磨子
 きさらぎのこちよこちよのチョコレート 篠田純子
 きさらぎの青菜を卵とぢにする 竹内弘子
 きさらぎの名ゆゑ二月を愛しけり 森なほ子
 きさらぎの水道水に刺のあり 大日向幸江
 如月や鑑真和上の御前に 木村茂登子
 如月や語尾のやさしき人と居る 田中藤穂
 如月や郵便受に年金便 斉藤裕子
 如月に入りて行事の立続け 長崎桂子
 如月の洋服ダンス開きたる 長崎桂子
 如月や錦眼鏡に倦きもせず 須賀敏子
 如月や励ましくる友の居て 山莊慶子
 如月のずんと富岳や夜があける 井上石動
 如月や霽れきらぬまま暮るる空 森なほ子
 如月や季節感なき川野山 長崎桂子
 如月の日付の合はぬカレンダー 大日向幸江

今年の立春は二月三日。へ春は名の見に風の寒さや、である。ではあるが言の葉で「春」と聴けば気もそぞろになるから不思議。

丈高きケーキ入刀あす立春 赤座典子
 立春や尾骶骨から尻尾かな 佐藤恭子
 立春や三半規管に水あふる 佐藤恭子
 立春のかぜ海の香を運びくる 鎌倉喜久恵
 立春の雀タベの豆あさる 長崎桂子
 立春や第九ソプラノ黄のドレス 須賀敏子
 立春大吉肩の力を抜いてゆく 堀内一郎
 立春の水とくとくと咽を過ぐ 森山のりこ
 立春の天眼鏡を磨き上ぐ 木村茂登子
 白い器に立春の湯を満たしをり 田中藤穂
 何買はう立春大吉花屋混み 定梶じょう
 立春やポストの背より少しだけ 佐藤恭子
 立春や小学生の声通る 秋川 泉

立春の風強き宵吾子走る 秋川 泉
 警蹕の声か立春星走る 定梶じょう
 立春や写メにてしばしご挨拶 秋川 泉
 立春の朝コーヒーと柁の豆 赤座典子
 立春の風の強さにきらめく葉 森なほ子
 立春や鴨の啄む昨夜の豆 森なほ子
 立春やワクチンを待つ群静か 森なほ子
 立春の花壇に光やはらかに 秋川 泉
 春立つや紙飛行機のコンコルド 赤座典子
 春立つ日自己が節目の齢なり 芝宮須磨子
 春立つや木々一斉に黄を競ふ 鎌倉喜久恵
 ひらきそむ嬰兒の拳春立てり 渡邊友七
 春立ちて見送りいらぬと鍵を置く 斉藤裕子
 オリオンの真下春立つ雪の宿 渡邊友七
 蠢きてあうらから春立ちのぼる 佐藤恭子
 自転車が小石を弾き春立てり 竹内弘子
 春立つや施設の昼食旬のもの 鈴木多枝子

のは私だけだらうか。



春立つやピエロの様な衿の服
田中藤穂
空仰ぐ米屋の主春立つ日
赤座典子
春立つや大江戸線をひとめぐり
芝 尚子
矢の如く跳び出す雀春立つ日
篠田純子
春立つ日狐の嫁入り通り過ぐ
赤座典子
富士ぎりり十国峠春立てり
須賀敏子
発酵を待つ句三つ四つ春立てり
田中藤穂
折紙の百枚百色春立てり
田中藤穂
如卵つるりと剥けて春立てり
森なほ子
春立や寄せ植こんもり日に映えて
長崎桂子
コンクリートの街に土の香春立てり
篠田純子
リモコンの電池とり替へ春立つ日
長崎桂子
春立つ日うたふと決めし「早春賦」
森なほ子
春立つや泥んこになるスクーター
篠田大佳
春立つや海は譜曲を奏でをり
長崎桂子
春立つや席の取り合ひ給餌皿
七郎衛門吉保

「早春」は「浅春」「春浅し」よりも心地よくひびく

早春の花舗に溢れる水打たれ
松本米子
早春の月光返す児の瞳
松本米子
地の起伏陽が早春をみだす
渡邊友七
早春や鰐の半眼水の中
竹内弘子
極上の早春の月岩畳
赤座典子
早春は黄からはじまるいさぎよし
鎌倉喜久恵
早春のやさし水くき書道展
鎌倉喜久恵
「ねむの木の家」早春のゆるき坂
木村茂登子
早春の天空にせし飛翔かな
佐藤恭子
青天井早春の雲二三片
田中藤穂
早春のカレンダーに行事の丸
長崎桂子
早春や渚静まり柔らかき
長崎桂子

堤防は早春の色こかしこ
長崎桂子
窓に日の差し早春の息吹かな
長崎桂子
早春の高き梢のせせらげる
佐藤喜孝
早春の道の駅なる昔菓子
田中藤穂
早春の築地川から隅田川
佐藤喜孝
春立つ日うたふと決めし「早春賦」
森なほ子
山脈のやうな雲あり街早春
田中藤穂

ルンペンの枕の洋書春浅き
関口ゆき
春浅しロビーにひびく調律音
山莊慶子
春浅き双眼鏡を木より木に
渡邊京子
春浅し白き化粧の道祖神
須賀敏子
春浅し山や野や里串揚げに
東亜未
縄文の白き貝殻春浅し
早崎泰江
エンジンのかからぬ小舟春浅し
篠田純子
春浅し馴染みし鈴の紐替へる
森山のりこ
春浅し帽子美人と言はれけり
堀内 一郎
春浅き酒蔵の水溢れをり
田中藤穂

術前のリスク説明春浅し
齊藤裕子
対岸にクレーン動きて春浅し
山莊慶子
しわくたの千円札で春浅き
定梶じょう
春浅し荒物屋の軒笈揺るる
赤座典子
春浅く握手する手の仄紅く
大日向幸江
春浅し居つきし猫と歳をとる
佐藤喜孝
湯上がりの踵クリーム春浅し
須賀敏子
春浅し芥集積場のネット巻く
長崎桂子
春浅し一日笑ってパンダ見て
大日向幸江
春浅し脱いだ形に色足袋の
大日向幸江
春浅し米とぐ水の澄んでをり
大日向幸江
春浅し虐待ニュース吹き溜る
七郎衛門吉保
角砂糖紅茶に沈め春浅し
森なほ子
春浅し湖上火の檸檬色
赤座典子
春浅し壁より壁へ日の移り
森なほ子
少年の雑談手話にて春浅し
篠田大佳
春浅し全豪オープン無観客
赤座典子
世代交代盛者必衰春浅し
赤座典子

あとがき

今月の表紙

東京・浜離宮庭園の菜の花です。青空の下、見渡す限りの菜の花の後ろには、汐留の高層ビルがそびえ立っています。（撮影・墨沱）

春蚓秋蛇

二〇一一年、この年の御題「葉」にちなんだ傳句会の痕の新年会の座で書いていただいたと記憶してゐるが自信はない。しばらく続きますので楽しみください。

作品鑑賞

篠田大佳さんと森なほ子さんには長期間書いていただくことになり感謝してをります。特に拙句を必ず採りあげてくださり申し訳なく体を小さくしてをります。日本語は読み方により多面的で読み手によって幾通りも表情が変化するものだと言ったことがあります。金子兜太は幾通りかの読みが生じたら作者の意図は考慮せず一番良いとおもふ解釈を選ぶ、と言った記憶があります。

『あを』作品は作者のことを知る立場にあります。其処を目をつぶって作者の意図を付度せず作品に向き合って書いてゐるつもりではありませんが、理想通りにはなかなかゆきません。来月号からは篠田大佳さんと赤座典子と三人で努めます。書き手の方も読み手の方もよろしくお願いいたします。

（喜孝）

二〇二五年二月号

発行日 二月二十三日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリ エイマ

会費 一五〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）